日食の見える病室

十奥海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
日食の見える病室

【Ｎコード】
Ｎ８５８４Ｚ

【作者名】
十奥海

【あらすじ】
心疾患の人たちが集められる病院の５階。
そこの５０１号室で、高蒔　蒼也と雪森　恋は出会った。
恋は入院初日から病院を出たい、といい始めそこから物語がはじまる。

序（前書き）

しょっぱなから、残酷描写なのでご注意

序

家族三人がそろって俺たちはリビングに立っていた。椅子に座っているのはお袋だけ。そのお袋は力なく首が横に倒れ腕も椅子の腕かけに乗せてあるがピクリと動く様子もない。

親父は言った。

「すまない・・・すまない・・・」

お袋の座っている椅子に崩れるようにひざをつき静かに謝りの言葉を放ち続けていた。

「なにが・・起きたんだよ。なぁ、親父?」

俺はさっきまでリビングのソファーに寝転がって寝ていたからまったく何が起きたかわからない。だが、ひとつわかる事がある。

お袋の顔は原型がわからないほどに凹んでいて、血が止まらない。いつからその血が流れているのかわからないが、まだ止まる様子がない。

お袋は死んだんだ。

「俺が・・・・」

親父はそういって止まってしまった。

「親父が・・・やったのか?」

「・・・・ああ。俺が全部やったんだ!」

大きな声で親父は断言した・・・・

序（後書き）

この後からストーリーが始まります

脱走少女との邂逅（前書き）

実質ストーリーはここから始まる感じです

脱走少女との邂逅

・・・・・眠りからだんだんと覚めてくる。目を開けると明るい蛍光灯の光が目にしみる。

「夢か・・・」

嫌な昔の夢を見て寝覚めが最悪だ。体も汗で濡れて気持ちが悪い。

周りを見ると自分がいる場所が家ではないことを思い出した。

俺はここ最近、俺は二カ月ほど入院生活を送っているんだ。昔からよく入院をすることのある俺だったがこんなに長いのは初めてだ。ここには、知り合いもいるし別に入院が嫌というわけでもないのだが。

長い入院生活何があるか分からないもので、3日前ほどに同じ病室のじいさんが亡くなった。よく話してた分悲しみもまた大きかった。このときだけは入院生活を嫌ったものだ。入院していたら葬式にも出てやれない。

横を見ると既に荷物が片付けられ新しい入院患者の受け入れ準備が完了している。俺の収納箱の上にはじいさんからもらった、花弁が一枚しか付いていない造花が飾られている。

「俺の命はこの花弁が落ちた時、ねぇ・・・落ちる訳ねぇじゃねえか、はは」

前にじいさんと話していたこと思い出して一人で笑う。

ふと、病室の外が騒がしくなっているのに気づいた。

「放せ！私は元気いっぱいだ！入院なんてしてたまるか！」

よくいる入院を嫌がる子供だろうか。子供というのは病院を毛嫌いすることがある。俺も昔は嫌いだったから、初めて入院と聞いた時は恐ろしくてたまらなかった。

「お嬢様暴れないでください。旦那様からきちんと療養させるようにと仰せつかっておりますので、どうか言うことを聞いてください」

どっかの御令嬢なのか執事らしき人が引っ張ってきている感じに

もめている。
「嫌だ！私は元気だから入院なんてしなくていいの！そう、お父さんに・・・」
バタン
言葉の途中で倒れ込む少女。無理をするからそうなるんだ。
「お嬢様！大丈夫でございますか？やはりちゃんとお休みになられなければ」
「ふぁ・・・もういいわ。５０１号室。私の病室はここだったかしら」
力ない声をもらして、少女は俺の病室の前で病室番号を確認していた。こいつが新しい入院患者か。
「そうですね。では入りましょう」
ガラガラガラ
大きな荷物を執事持たせて入ってくる少女と執事。扉越しで声でしか判断していなかったが、実際少女を見てみると意外に年が近そうだった。声だけなら小学生かなんかと間違えるくらい幼いのに。執事の方は声の印象通りガタイの良い男だった。
病室に入って目に入ってきたのはどうやら俺らしく、じっと二人に見つめられた。
「あ、ども、相部屋の高蒔です」
「こんにちは、今日からお嬢様がお世話になります。こちらお嬢様の雪守　恋様です」
「よろしくっ、とりあえず早く荷物を片づけちゃいましょ秋津」
「はいお嬢様」
そう言って少女は布団に座ってただ見ているだけだった。執事の方は大きなキャリーケースからいろいろなものを取り出して収納箱の中にどんどんしまっていく。てきぱきと、荷物が収納箱に入っていく様子を見るとこれぞ執事の仕事っと言った感じだろうか。そして、最後には収納箱の上にスタンド照明を置いて準備完了。時間にして2，3分だろうか。

これが執事ってやつかー。なんか、想像していたまんまだな。
「ではお嬢様、わたくしは旦那様にご報告をしてまいりますのであとは、ご自由にしていてください」
「ありがと、あとお父さんに馬鹿野郎って伝えておいて」
「かしこまりました」
そこ普通に了承するんだ。なんかフォローしろよ執事。
「じゃぁねぇ～」
そして、執事は少女に見送られ去って行った。
二人きりになって思ったが、こんなタイプの人間を見たこと無かったからなんて切り出そうか迷ってしまう。だが、相部屋だしなんか少しぐらい話しておかないと、後で無言が続く地獄の様な空間が生まれそうで怖いし。
そんな事を考えながら、横をちらっと見てみるとすぐ目の前に少女は立っていた。
「うわぁ！」
黒く長い髪を黒いリボンでツインテールにしていてリボンがあまり目立っていないのが特徴的な少女が居た。
「何びっくりしてんのよ。失礼しちゃうわ。ねぇ、あんたここに来てどのくらい経つの？」
「俺か？俺は今二カ月ちょいってところだな。たしか、雪守恋ったか？」
「そうよ、恋って呼び捨てにしちゃってかまわないわ」
そう言いつつ、恋は見舞いに来た人が座る椅子に座る。
「恋は、やっぱり心疾患でここに来たんだよな？」
すると恋はきょとんとした顔をして訪ねてきた。
「なんで知ってんの？あんた私のストーカー？」
「なんで俺が知らない女のストーカーなんてしなきゃいけねぇんだよ。ここの病棟は皆心疾患の患者が集められてるんだ。だから隣の病室も同じだぜ」
「へぇ～、まぁなんだっていいわ。私この病院からさっさと出たい

の！」
　恋は身を乗り出して俺に迫ってきた。案外近くでみるとかわいいな・・・じゃなくて
「は？・・・さっき倒れてたじゃねぇかよ。一日ぐらいここに居たっていいじゃねぇか」
「別に一日ぐらいいてもいいんだけど。それじゃあやる気が無くなっちゃいそうでやだ！あんたも手伝って！」
「俺はあんたじゃなくて高蒔　蒼也だ。蒼也って呼んでくれて構わないからちゃんと名前でよべ」
「別に名前なんてどうでもいいのよ。私はここから出たいの蒼也！」
　なんだか面倒だな。
「出たいなら、そのまま外に出ればいいじゃねえか」
「ダメなの！さっき見たいな執事が見張っててでれないのよ」
　しょんぼりと、椅子に座りなおす恋。しかし、そこまで見張られるって何したんだこいつは。
「なんでそんなんに俺が付き合わなきゃいけねぇんだよ。捕まる時は俺が居たっていなくたっておんなじだよ。ま、俺らの病棟は外出禁止だからまず他の看護婦とかに捕まる可能性もあるけどな」
「えー！何それ聞いてないよ！」
「ちゃんと人の話は聞いとけよ、ここ来る前に説明受けてるだろ。恋の付けてるその腕輪の色みたら素晴らしい笑顔で看護婦か誰かに止められるぜ」
　恋の腕輪を指を指す。まったく腕輪の意味を知らなかったのか呆けた顔をして自分の腕輪を見ていた。ちなみに、俺らの腕輪の色は黄色。
「はぁー、もうどうやったら出れるのよ！」
「だから、俺らはそんだけ危ない状態にあるってことなんだよ。おとなしく寝とけ」
「むぅー、しょうがないわね・・・じゃ、食堂行きましょ」
　この病院には、食堂が用意されている。動けない患者以外はそこ

で食べるように義務付けられている。最低限食事ぐらいは移動して食べさせなければ、まったく動こうとしない患者もいるらしく、そういった方針にしたらしい。バリエーションも多めで結構充実した病院食が食べれて人気も高いらしい。

「・・・暇だし、そんくらいは付きあってやるよ」

なんだか、ペースを持ってかれてるな。

俺たちは、食堂へ向かった。

脱走少女との邂逅（後書き）

こんな奴病室に来たら、めんどくさそうだけど面白そうだよね～

たまごボーロはカルシウムを含んでおります

食堂

さすが病院と言った感じで、入院患者数も結構多い病院だし午後3時過ぎだと言うのに人が多い。ここに来ると病院と言う場所が非日常であることを一番思い知らされる。

普通の社会では3時と言ったら、学生は下校時間、社会人は働いている時間、主婦は家事全般の時間と言った感じなのだろうが、病院ではそんなものは無い。だから、食堂にいつでも人がいるようだ。

「なんでこんな人いるのー。もう、ゆっくり作戦でも練ろうと思ったのに」

売店の肉まんやらフライドチキンを眺めながらぼやく恋。

「ここは病院なんだから、時間を持て余した奴らばっかなんだろ。お、恋お前あれとか好きそうだな」

そう言って俺が指を指したのは、お菓子売り場のたまごボーロだ。

「何？それは私が子供っぽいって言いたいの？」

「よくわかったな。そう言うことだ」

「貴様！私がそんなに子供っぽくみえるのか！確かに、身長は少し小さめだが、これでも去年より3センチも伸びたんだぞこらぁ！」

ポコポコと殴るその手には威力は皆無でその姿は完璧に子供だった。周りから見たら、兄と妹程度の差に見えるのだろうか。

「そもそも、恋は歳いくつなんだよ？」

「私？私は１６よ。そう言う蒼也はいくつなのよ？」

「俺は１７だ。恋の一個上だな」

今日は9月１２日。俺の誕生日は6月4日だから今高校2年。適当に年上と言うことにしたが遅生まれとかだったら同じとしか。

「なんでそう決めるのよ。私は高校2年生の１６歳よ！」

「そうか、俺も2年だよ。別にどっちでもいいしな」

「よくない！同じ年なんだから子供扱い禁止！」

人差し指でぐいぐいと鎖骨らへんを押してくる恋。
「痛い痛い痛い、おま、変な所を押すな！」
そこまで痛くないが、鎖骨周辺を執拗に押されるとなんか気持ちがわるい。というか、少し痛いなやっぱ。
「次子供扱いしたら、叩いて防いでじゃんけんぽんよ！」
なんだその訳のわからない罰ゲームは。それは俺が叩いてもいいのか？
「わかったわかった。ほら、何食うんだよ。早く決めないと俺がたまごボーロ買っちまうぞ」
「そうねー、やっぱポテトでいいわ。おじちゃんポテト一つ頂戴！」
ようやく購入を終えて一息つける。そんな安息を期待したその時
「蒼也君はっけーん！」
妙な奴に捕まった。
「うわ・・・」
「誰？知り合い？」
「いや、知らないな。人違いじゃないか？」
蒼也は逃げようとした
「蒼也って呼ばれてて人違いはないでしょ」
「あら？こちら蒼也君の友達？恋人？婚約者？」
が、回り込まれた。逃亡失敗。俺は元気のいい金髪の髪を腰まで伸ばした髪の長い看護婦に捕まった。今日も今日とてこいつに出会うとは運が悪い。
「ど、どうも、蒼也の相部屋の雪守恋です」
恋がひいている・・・俺にはずいずいと迫ってきたくせに。やっぱり最初からあそこまでぐいぐいと来られると恋と言えどたじろいだりするんだな。
「こちらこそどうも、蒼也君の病棟の担当兼蒼也君の心のナースをしている高蒔　彼方です。よろしくです」
うわー。こいつはまた面倒くさそうなことを言いだしやがって
「蒼也の病棟の担当？・・・って私の所も担当ってことじゃない！」

「そうだな。今日からはきっと、俺の心のナースを止めて恋のナースになってくれるぜ・・・たぶん」
「何を言ってるんですか蒼也君、私は蒼也君が元気になるまで心のナースをやめないわよ」
そう言いながら彼方は懐からおもちゃの注射器を取りだした。自分の眼鏡に近づけてキラーンと擬音が聞こえてきそうだ。
「そんなもん病院で出すんじゃない！」
げんこつ一発に、おもちゃの注射器没収。
「あうー、私の注射器ー」
「な、なんか私早く退院しないと、毒されそうで怖いわ蒼也」
恐らく恋の言う退院とは病院からの脱出のことだろう。たしかに、俺もこいつを見てると早く社会復帰したくなる。彼方には自動人格強制機能が付いてるのかもしれない。
「そうだな・・・彼方を見てると恋の、退院を手伝ってやりたい気分になってくるぜ」
「あらあら、二人とももう仲がよろしいんですね。彼方やきもちやいちゃいますよ」
「わかったわかった、焼き餅でも、きな粉餅でもなんでもいいから早く業務に戻れ」
シッシと手を振ってこの場は何とか振り払うことに成功した。毎度のことながら元気が良くてよろしいが、こちらの精神体力も考慮して盛り上がっていただきたいものだ。
「なれてるわねー」
「まぁな・・・結構長い付き合いだから」
そうこう話している間に俺たちは開いてる席を見つけてやっと食事にありつけた。ちなみに俺はここに来た瞬間から既にフライドチキンを買っていた。
「さ、これからが本題よ。どうやってこの病院を抜け出すか。何か方法ない？」
「んな、唐突に言われてもなー・・・コンビニに行きたいとかそん

な理由じゃ出してくれそうにないし」
「二ヶ月も居るんだから少しぐらい警備の穴を見つけられるでしょ」
ダダをこねる恋。だが俺は、二ヶ月居たといってもこの病院を出たいと思ったこともないから、恋と同じ地点からの思考開始と同じようなものだ。
「なんだよ警備って、そんな厳重なものでもねえよ・・・でも駐輪場の出入り口だったら人も少ないんじゃないのか？」
「おお、やっぱり知ってるんじゃない蒼也」
「今考えたんだよ、お前でもそれくらい考えられるだろ。あと、監視が居ない保障もないしな」
「まずは、そこに行ってみればいいのよね」
「ま、そういうことだな。てか、恋は何でそこまでして外に出たいんだ」
「蒼也には関係ないでしょっ。ほら、駐輪場に行ってみましょ」
そういって恋は強引に会話を打ち切って、駐輪場へ行く準備を始める。
「おい、まだポテト食い終わってないだろ。」
「ポテトなんて食べながらでも行けるでしょ、ほら行くわよ」
「はいはい。食べながら歩いて注意されてもしらねぇぞ」
そして俺たちは駐輪場へ向かうことにした。俺のフライドチキンはもう実は食べ終わっていた。

たまごボーロはカルシウムを含んでおります（後書き）

鎖骨らへんてぐいぐい押されると変な感じしますよね・・・
とくに溝にフィットすると痛い・・・w

脱出経路は入念に調べるべし

駐輪場出入り口前

案の定、駐輪場へ来る間に通りすがいりの看護婦に「食べ歩きはダメですよー」と注意されて、結局途中のベンチでポテトを食べ終えてから来ることになった。

目の前には非常口のあの逃げ出す人のマークがついたあれがある。中々人が少なそうで実に脱走経路にはよさそうな場所だった。

「おお、いいじゃない。これなら何とかなりそうだわ。さすが、私の脱走パートナーいい案を出したわね」

恋は非常灯の下に立ち、うんうんと頷きながら周りを見回している。満足そうで何よりだが、俺は結局巻き込まれてしまったらしい。

「誰が脱走パートナーだ。俺を巻き込むな」

「残念ね、もう決定事項よ。そもそも、私達の病棟が病院を出ることが許されてないのが悪いのよ」

「安全のためだろ。危険な状態の患者外に放り出して死んでもらったら、病院の責任だしな」

「んなもん知っちゃこっちゃないわ。蒼也はなんで外に出ようとしないのよ?」

「患者が全員恋みたいな患者だったら病院やってらんねぇだろ」

「そうやって自分の身ばっかり案じちゃって、保守的な男は嫌われるわよ」

「大きなお世話だ。ダダをこねる女も嫌われるぞ」

「失礼しちゃうわ・・・」

「おーい、二人ともこんなところで何を密会してるのかなー」

恋の話の途中に彼方が現れた。なんてバッドタイミングな。彼方は遠くから手を振ってこっちに近づいてくる。

「あ〜・・・とりあえずは一旦病室に戻ったほうがよさそうだな」

「・・・・そうね」

反発されると思ったが、少しの躊躇いはあったもののすんなり了承をしてくれた。少し意外だ。そんなやり取り、が終わったぐらいに彼方が到着。
「何してたの？」
にっこりとした笑顔は、いつものことだがこう隠し事があると笑顔が痛い。
「いや、別にただ誰も居ないところでお話がしたくてなー、あははは」
話してて実にわざとっぽいのがにじみ出るような喋り方なのが自分で滑稽に思える。
「へー、まさかこんな人気のないところで蒼也君が、恋ちゃんにあんなことやこんなことをしようとしてたなんて・・・これはお父さんに報告ものね」
一転笑顔が恐ろしい微笑みに変わった。
「お、お前どんな報告するつもりだ。言っておくが俺は、ただ人目に触れないところで話がしたかっただけなんだ。別にそんなやましいことなんて」
あるんだけどな。特に、看護婦には絶対いえないやましいことが。
「な！あんた私に何しようとしたのよ！」
俺のフォローを無駄にしないいでくれーー！
「むしろ、恋が連れてきたようなものだろうが！それと、お前に何かするつもりなんてねえよ！」
「何よ！私みたいなかわいい子を見て何も思わないっていうの！」
「恋みたいな子供っぽい奴見たって何に興奮しろってんだよ！」
「あらあらあら、喧嘩は両成敗ですよ、ふふふ」
懐からまたもや注射器を出す彼方。
「それ、本物じゃねえか！や、やめろわかった。部屋にもどるから！」
後ずさりしながら、彼方に向けて静止の手をかざす。
「分かればよろしいの」

「むぅぅぅ」
何か不満げな恋だが注射器を前に屈服のご様子。ただの様子見で駐輪場まで来たわけだし、俺たちは早々に病室に戻ることにした。
帰っている途中に思ったが、彼方は仕事を放り出して駐輪場なんかに何をしに着ていたのだろうか。今度聞けばいいか。

脱出経路は入念に調べるべし（後書き）

注射器の不法な取り扱いにご注意ください
というか、彼方さんそんなもの持ち歩いて何なさるおつもり？

院長の孫娘（前書き）

今回は彼方視点になっております

院長の孫娘

院長室

「ただいまー！」

どんっ！

私はドアを思いっきり開けて院長室に入る。ノックもせずに開けたから、奥に座ってる院長はびっくりしていた。

「院長室に入るときはノックぐらいしなさいと、行っておろうが彼方。まったく、親の顔を見てみたいものだ」

「またまたー、おじいちゃんの娘が私の親でしょうが」

「おや？そうじゃったか？まったく我が娘は何をしておるのか」

そう、私「高蒔　彼方」はここの院長の孫娘なのです。学校が終わったら、こうしていつも看護婦の手伝いをしに来ているのです。

「下で、受付してたよー」

「なんとまぁ、娘をほったらかして働いているとは嘆かわしい」

「おじいちゃん、いつもながら言ってる事がむちゃくちゃだねー」

おじいちゃん曰く、これはおじいちゃんなりのジョークらしい。だが、すでに還暦を過ぎたおじいちゃんが言うとすでにもうろくしたおっさんのように聞こえてしまう。院内でも、「院長はすでにぼけてるんじゃないか」とかそんな噂が流れている。

困った性分なおじいちゃんなのです。

「ほいで、あの二人は仲ようやっとったか？」

「うん、やっぱり同じ病室だったからなのか仲良かったよ！」

「そうかそうか、それは重畳」

「まったく、おじいちゃんはほんとにろくな事かんがえないよね。雪守さんとこのお嬢さんが脱走計画を企てるのを予想して蒼也君の部屋に入れるなんて」

実はおじいちゃんはもうろくなんてしていないのです。まだまだ、おてんば盛りの困ったおじいちゃんです。

今回も、おじいちゃんの指示によって恋ちゃんは蒼也君の部屋に入れることに決まったのだが。
「ほっほっほ、これからが楽しみじゃのぅ」
実に嫌な笑みを浮かべるおっさんです。

院長の孫娘（後書き）

高校生にもなった孫娘を持ってるじいさんが働いてる時点で非現実的・・・・と、今更反省

恋の記憶

恋と蒼也の病室「５０１号室」
「ふぅ、彼方って子は恐ろいわね・・・というか、あの子はあそこで何してたのかしら？」
あの後、恋がこの病院内を色々見て周りたいと言い出して結局一時間ほど歩き回ってから自分達の病室に着いた。
病院は意外に大きく回るところが多くて時間がかかるものだ。
「彼方の考えることなんて理解不能だからな。幼馴染だけど、正直何考えてるのか分かったことなんて殆どないな」
「へぇ、幼馴染なんだ。そういえば、あの子お父さんに報告するとか言ってたわね。そんなに、家族同士で仲がいいの？」
「・・・あいつの、父親が俺の父さんだからな」
自分で言っててなんだか分かりづらい説明だな。
「何それ？それって、兄弟ってことじゃん」
きょとんとした顔で俺に問いかけて来る恋。まあ、俺でもそんな説明されたら訳が分からなくなるな。
「・・・二年前に俺は親父に捨てられたんだ」
「え？」
「母さんももう居ないから、彼方の親父さんに養子にとってもらってなんとか生活してるわけだよ」
「ご、ごめん。なんか変な事聞いちゃって」
威勢の良かった恋が申し訳なさそうに俺から目をそらす。
「そんな顔するなよ。俺が悪いことしたみたいじゃねえか。別にあんま気にしてないから、恋も気にするなよ」
「でも、蒼也の本当のお父さんって今も外でのうのうと暮らしてるのよね？」
「ああ」
「じゃあ、一緒にここから出て探そうよ！」

見舞い用の椅子から一気に俺に向かって寄ってくる恋。一瞬で申し訳の欠片もなくなったなこの小娘は。
「お前な・・・ふぅ」
「何よ、いいじゃない。気にするなって言ったのはあんたでしょ！だから、私は気にしないわよ。しかも、あんたも外に出る理由が出来れば手伝いやすくなるじゃない」
恋にはまだ理解できていないらしい。彼方の兄弟に当たるということがどういうことであるのかを。
だが、本気で抜け出したい様子の恋をこのままにしておくもかわいそうに思える。しかも、こんなのを一人で動かせたら危険でしょうがない。
「・・・わかったよ。だが、そのかわり恋が病院を出たい理由を話したら手伝ってやる。訳の分からん理由だったら付き合わないからな」
気は向かないが、病院の安全のためと恋自身の安全のためにも理由を聞いて見ることにした。
聞き出すのに少しは抵抗されると思ったが
「しょうがないわね。私は、夏祭りにに行きたいのよ。ただそれだけ。悪いかしら？」
顔はむっすりとしていたが、あっさりと理由を聞き出すことが出来た。
だが、二ヶ月も入院生活を送っていた俺に夏祭りの存在など知る由も無かった、それがいつ行われるのか・・・それが重要だ。
「夏祭り？」
「知らないの？今度の土日に笹沢神社でやるのよ。まったく世間知らずねぇ」
ふぅ、とため息をついてあきれる恋。二ヶ月も入院してたんだから知るか、といってやりたいが、正直まつりごとにもともと興味を持っていない俺は去年も祭りの存在を認知していなかったし、言い返せない。土日ってことは、今日が水曜日だからあと3日も余裕が

あるじゃないか。
「うるせえよ。しかも、そんな無理して行かなくても来年いけばいいだろ」
「蒼也はさ・・・あと余命何年って言われてるの？」
表情が一転して、真剣な顔になった。だが、俺の顔を見ているわけではなくただ花瓶に入れられた造花をぼーっと見ながら俺に問いかけてくる。
「え？俺か？えーっと・・・」
不意に聞かれた問いに俺は焦って前に診断してもらった時のことを思い浮かべてみた。が前の診断では今回は長い入院になると言われただけで余命の話なんてしていなかった。別にそこまで深刻ではないと自分では思っていたからまだ、何年かは生きるつもりではいる。
「そう言えば、余命なんていわれたことがないな。でも、言われないってことは俺はまだ大丈夫なんじゃないか？」
余命の話が出るということは恋は、すでに余命が近いのだろうか。そんな、深刻な話を今持ちかけられても心の準備もできていないし。
「そう・・・私もまだ言われてないの」
なんだ同じなんじゃないか、そうほっとするが深刻そうな顔からまったく晴れる様子の無い恋。
「んじゃあ、恋もまだ大丈夫なんじゃないのか？」
「ほんとにそうかしら・・・確かに病院側から私に言われてるのはしばらく休養してください、って言われてるだけだけど・・・お父さんは泣いてた」
やはり、ずっしりと来る話が待ち受けていた。けど、何に泣いていたのかわからない以上余命が近いなんてことに繋がるのだろうか。
「だったら、尚更病院を出たら心配かけるぜ」
俺はただ恋を心配に思っての言葉でその言葉が出た。だが恋は
「わかってるわよ！でもね、もし来年私が死んでたらどうしようって！弟を夏祭りに連れていけなかったらどうしようって考えちゃう

のよ！」
頭を抱えながら苦しそうに泣く恋。
そして、弟という初めて聞く単語に俺は動揺する。つまりは、思い出をちゃんと残しておきたいということなのだろうか。弟とちゃんと楽しく過ごした記憶を残したいのだろうか。俺が考えたところで、恋の気持ちを読めるわけではないが。
泣きじゃくる恋に、俺はそっと近づいて話しかけた。
「悪い・・・そんなに、思い詰めてるとは思ってなかったからさ。お詫びにって訳でもないけど、理由も聞けたし病院抜け出すの、協力するぜ」
そういって、恋に握手の手を差し伸べる。
涙の後を残して顔を上げる恋。その顔には、少しながら笑顔が取り戻されていた。
「えへへ、ありがと。でも、私が泣いたこと絶対に誰にも言わないでよ」
差し出した手は、強く握り返された。握られた手は小さくやはり子供っぽくて頼りなく、手伝ってやりたいと言う気持ちに促進剤でもかけられた気分だ。
「わかったよ。でも、俺が居るからって外に出られる保障があるわけじゃないけどな」
「何言ってるのよ！出られるまで付き合ってもらうわよ！」
「はいはい」
こうして、俺は恋と共犯関係になることに決まった。

恋の記憶（後書き）

自分で書いてて急展開すぎてまとまりがないのに
ちょっとショッキング

ネジは院長室に置いてきてます

ガラガラガラ
「こっこここっこ、こけっこっこー。おはようございますー。元気にしてるかい？」
ちょうど話が一段落したところに病院の院長が現れた。いつもながら、頭のねじが一本とんだような雰囲気のこの人は何をしでかすか分からなくて恐ろしい。
「院長。どうかしたんですか？」
俺は恋とつないでいた手を放して院長の方へと向き直った。
「院長？」
「あ、どーも、どーも、うちの孫が世話になってるのぉ雪森君とこのお嬢さん。それと蒼也、わしのことは院長じゃなくておじいちゃんと呼べといっておるだろう」
そう、このじいさんは俺が彼方の親父の養子にしてもらった事によって親戚のおじいちゃんという肩書きになったのだ。それから、何度も言われるがどこか抵抗があって院長と呼んでしまう。だが、はっきり言ってしまうと呼び方を変えるのが面倒なだけだ。
「おじいちゃんなんて呼ぶ高校生が呼ぶわけないだろ。じいさんでいいだろじいさんで」
「何！？わしはまだもうろくしてないと言ってるだろ！」
「別にもうろくしてるなんていってねぇだろ！」
「おじいちゃんだったらもうろくしとらんが、じいさんはもうろくした奴を指すんじゃ！」
一瞬院長の話に納得しかけてしまうが
「それ今考えただろ！」
「そうじゃ」
確かにもうろくしてなさそうだ。これだけの冗談をかませればもうろくなんてかけらもしてなさそうだ。しかし、即座に認めたなこ

のじいさんは。
「んで、何か用でもあるんですか院長」
やはり、院長がしっくりくるから院長に戻ってしまう。
「おお、そうじゃそうじゃ・・・・おや？何をしに来たんだっけかのう？」
あごに手を当てて考え込む院長。
「やっぱ、そろそろじいさんになる年頃なんじゃねぇのか？」
「うるさい！今思い出すからちょいと待っておれ・・・」
しばらく考え込む院長。このじいさんは本当はもうもうろくしていそうだな。
俺は院長が考え込んでる間に自分のベッドに戻って布団に入った。
布団に入った瞬間院長は
「そうじゃそうじゃ、恋君のお父さんから預かり物があったのじゃ。まったく、蒼也がわしをじいさん呼ばわりするから忘れるとこじゃったわい」
「私に？何かしら」
院長は恋の前に立ってポケットから何かを取り出した。
「お父さんに娘さんの相部屋が男だって言ったらの、催涙スプレーを持たしてやってくれといわれたのじゃよ。ほっほっほ」
「あらぁ、中々気が利くものをお父さんもくれることがあるのね」
「それは一体どういう意味だ」
俺はけだものって言いたいのだろうか。
「だって、蒼也がいきなり襲い掛かってくることもあるかもしれないじゃない？」
「誰が襲い掛かるか！前にも言ったがお前みたいに子供っぽいやつに」
さっ
すかさず催涙スプレーを構える恋。こいつに催涙スプレーを渡したらかなり危ない気がしてきた今このとき。
相部屋と言ってもベッドの距離は離れているためそれに警戒する

必要性は無いが、近くに居る時に構えられたら抵抗できそうにないな。
「ほっほっほ、じゃわしは忙しいから帰らせてもらおうかの。念のため催涙スプレーは肌身放さず持ち続ける事をお勧めするぞい」
ガラガラガラ
開けてあった扉は閉じられて院長は去っていった。
毎度の事ながら、あのじいさんが来るといらぬ体力を消耗させられる。しかも、今回は恋に凶器を残して帰って行ったし。ま、それの送り主はじいさんじゃないんだが。
「疲れた・・・ま、とりあえずだ、話を戻すが病院を抜け出すのをどうするかだ」
「へ？そりゃもうさっき、決まったじゃない。早く行きましょ」
恋の単細胞っぷりに落胆する。
「お前な・・・。祭りって3日後だろ？そんな早く出てって、祭りの日より前に病院に連れ戻されたらどうすんだよ」
「・・・それもそうね。でも、それだったら祭り当日までどっかホテルに泊まるか蒼也の家に泊まるとかでいいんじゃない？」
「ホテルに泊まる金なんて無いだろ」
「あるわよ。私をなめないでもらいたいわ」
そう言って恋は収納箱から財布を取り出してお札の枚数を数え始めた。ベッドに座りながら放しているから距離が離れていて何のお札かは見えないが札束がどばっと出てきたのが見えた。
あいつは、あんなに札束を持って盗難にでもあったら一体どうするんだ。
パラパパラパラ
「うん・・・ざっと２０万ぐらいはあるから大丈夫よ」
「お前どんだけ金持ち歩いてんだよ！もっと、盗難にあった時とかのことを考えろよ！」
「うるさいわねぇ。いつもは執事が付いてるからそんな心配ないのよ」

「それにしても持ちすぎだろ・・・でも、金の心配が無くなったのはいいことだな」
これで、外に出ても食い物に困るようなことは無い。だが、他にも捜索願とか色々と厄介ごとが付きまとうが・・・まぁ、そんなことを気にしてたら病院を抜け出した時点で負い目を感じるべきか。
「よし、じゃぁ抜け出すのは今夜にしよう。昼だと看護婦とか執事がたくさん居そうであぶないからな」
自ら作戦の案を出した今、自分がもう恋に毒されていることに気づいた。これはもう後戻りできないと言うことか。
「おー！」
元気よく腕を上に上げて嬉しそうにする恋。
「じゃ、そうゆうわけで夜までおやすみ～」
「ってなんで、何寝てるのよ！」
「夜までしっかり寝ないと夜が辛いぞ～」
俺はすでに布団にもぐっておやすみと腕を振った。
さっさと、寝ないとほんとに夜眠くて作戦は睡魔に潰されかねない。
「なんか私の意見が反映されなくてつまんない・・・まぁいいわ。おやすみ」
ふてくされながらもちゃんと寝ておくその姿勢はやはり病院を抜け出したいからなのだろうか。それともただの単細胞なのだろうか。
そうして、俺達は夜まで寝る事にした。

ネジは院長室に置いてきてます（後書き）

催涙スプレーって市販されてるところ見たこと無いけど見たことあるひと居ます？
護身用によさそうだけどお手軽感ないっすよねw

女子トイレに入るぐらいいいじゃないか

深夜００：００

「ぐごぉぉぁぁあ・・・ぐおぉぉあああぁ・・むにゃむにゃ」

・・・・

「ぐごおぉおっ！ぐっぐぐ・・・・ごおぉぉ」

・・・・・・

・・・・・・・・・うるさすぎる！！！

これが伝説のあれか・・・お父さんイビキうるさい。

いやまて、恋はまだ１６才であって、男でもない。世の中こんな、イビキをかく女も居るものなんだな。というか、俺はこんな怪物と相部屋でともに過ごすことになるところだったのか。そう考えると恋が病院脱出の案を出してくれたのは不幸中の幸いって奴だろうか。

兎に角、すでに深夜０時を回ったことだしこいつを起こして作戦を決行しなければ。

俺は布団から抜け出して恋を起こしに行った。

ガラガラガラ

その時誰かが俺らの病室に入ってきた。

見回りの看護婦などが居たらばれてしまいそうで危険だから部屋には明かりをつけないでいたから、顔がよくみえない。

「ん～、蒼也君トイレ～」

その声は彼方だった。よく見ると白いパジャマと金髪の髪の毛が目立って分かりやすかった。

実はここ二ヶ月の入院生活で何度かあったのだが、彼方はトイレに行きたい、といって寝ぼけてここまで来ることがあるのだ。

「はぁ～、お前なここに来る間に2，3個トイレはあるだろ」

といっても、寝ぼけているのだから気づくはずもなし。

「無いよ～。いいから、トイレいこ～」

目をこすりながら眠そうにする彼方。

「わかったわかった。行くぞほら」
しかし、これも不幸中の幸いなのだろうか、０時より前に作戦決行をしていたらこいつに即座にばれていた。その分、この時間より後に来てもらうよりありがたかった。

ガチャン
彼方がトイレに入る音がした。
深夜の病院内。
入院したてのころは、恐ろしいもの見たさ的な何かで夜の病院を見て回ったりしたが、本当に怖いものだ。音もなく、窓を見れば街頭に照らされた木々が見えるだけ、そして電気が半分以上消されているこの状況は本当に怖い。風流と捉える人も居るらしいがそんな、メルヘン全開な脳みそしていないわけで。
俺は彼方を連れてトイレにやってきて、夜だし誰も居ないということで女子トイレにお邪魔している。別に、入りたいわけじゃないんだ、うん、違うんだ。
・・・・
「まだか～」
「あれ～、蒼也君一人になって怖いのかな～？」
「別に怖くねえよ」
虚勢。正直言ってしまうと、横に誰も居ない深夜の病院ってのは怖い。
もしかしたら、この恐ろしい状態が嫌であのお嬢さんは相部屋を選んだのかもしれない。なんてことを考えてしまう。
「そっか。私は怖いな～。でも、今は蒼也君が居るから安心」
機嫌がよさそうに話す彼方。
「そうか、早くしろよ」
「は～い」
バタン
のそのそと現れた彼方はパジャマが着崩れ肩が出て眠たそうに出

てきた。
「まったく、ちゃんと服ぐらい着ろよな。ほら、ちゃんと直せ」
そう言いつつ、彼方の襟を掴んで首元に戻す。
「えへへ～、蒼也君のえっち～」
「うるせぇ、トイレが済んだらさっさと戻るぞ」
「は～い」
最初は寝ぼけてるのかと思っていたが、彼方は素でこの性格だから寝ぼけているわけではないのかもしれない。
となると、また対応を変えて行きたいところだ。と言っても、寝ぼけてるのか確認する術もないのだが。
「ったく、さっさと部屋に戻るぞ。俺も早く寝たいんだからよ」
「あれあれ～？実はかなちゃん見ちゃったんだよ～」
突然、何かを疑うような目線でこちらを見てくる彼方。咎められることならこれからしようとしているわけでまだしていないし、何を見たと言うのだろうか。そして、かなちゃんとは自分の事だろう。
「な、何をだ？」
「さっき、私が部屋に入った時、恋ちゃんの隣に立って何してたのかな～？・・・まさか、夜這い？」
嫌な笑みを浮かべてこちらを見やる彼方。誰の血を受け継いだらこんな嫌らしい目つきになることやら。彼方の父親も母親もまじめだし、どこら辺の血がこうさせるのか。・・・あの、じいさんぐらいか。
「んなわけねえだろ！ちょっと・・・あれだよ・・・なんていうか・・・いびきがうるさいんだよあいつ！」
「ふぅ。確かに恋ちゃんのいびきうるさかったね～。だからって起しちゃかわいそうだよ！」
正論ですね。もともと、いびきがうるさいから起そうとしていたわけではないが、正論であって言い返せない。
「そ、そうだよな。だから、どうしようか考えてたんだよ。ま、そんなことはどうでもいいんだよ。さっさと部屋に戻るぞ」

俺は、このまま言及されていったらボロが出そうで恐ろしくなり早急に彼方を部屋に戻す方向へと話を変える。
「そうだね～。私ももう眠く・・・くけー」
バタッ
俺の目の前で崩れる彼方。それを俺はギリ支えに入る。
「おいっ！部屋で寝ろ！起きろー」
「くけー、んん～・・・ワサビおくれ～」
「くそ」
結局その後俺は、彼方を引きずって彼方の部屋まで連れて行った。しかし、トイレから出る際に夜中起きてトイレに来る少女に出くわしてしまい何食わぬ顔で済ましたが、少女の目は白いものだった。
さらば、我が威厳。ごく小さな威厳しか持っているつもりは無かったが、それも消え去った。
威厳は彼方の部屋に置いていき、俺は自分の病室に戻っていった。
ちなみに、彼方の部屋は病院の８階にある。８階は高蒔家の部屋として使われているのだ。

女子トイレに入るぐらいいいじゃないか（後書き）

夜中ぐらい女子トイレに入っても別に
ばれないですよね？・・・・・え？ダメ？

胡蝶の夢の如し

3，2，1
パチコーン！
「痛っ！」
0カウントで俺のデコピンは恋のおでこにクリーンヒットした。
言葉はちゃんと反応するが、まだ体を起そうとせずにだるそうに布団にもぐりこむ恋。
「もぐるな！」
「はっ！催涙スプレー手放してた！」
恋は一気に睡眠状態から覚醒して、体を起した。
「別になんもしようとしてねえよ。強いて言うならその、口をふさいでやろうかとは思ったが」
「え？何？キモ。キスしようとしてたって事？」
「いびきを止めるためにティッシュでも詰めてやろうかとしてたってことだ」
「もう、私がかわいすぎるからって夜這いしようとしてたなんて、やっぱり催涙スプレーは必要だったみたいね」
「人の話を聞け」
そもそも、催涙スプレーはベッドの横に居て収納箱が真横にある俺の方が近いわけで優勢にある。
「今何時？」
「もう深夜1時だ」
恋はその言葉を聞いて少しむっとした表情を見せた。
「0時に行くんじゃなかったの？」
「その時間まで寝てたやつに言われたくねえよ。どうでもいいが、さっさと準備しろよ」
そう言って俺は、椅子から立ちあがり、自分の収納箱から必要なものを取り出し始めた。つられて、恋も動き出して収納箱からいろ

んなものを取り出し始めた。
財布、着替えの服、薬。
外に出るために何を持っていこうと模索してみるが、これら以外持って行ってもあまり役に立ちそうになさそうで置いていくことにした。
ぱっと見ると荷物になる物が服以外無く服を置いていこうか迷う。
横の恋の姿を見ると、きちんと催涙スプレーが荷物の中に入っていた。
そして、それらを小さなバックに詰め込んで準備完了。
「よし、さぁ遠足よー」
恋は元気よく腕をあげて小さな声で叫んでいた。
「遠足じゃねえだろ、ただの脱出だ」
「うるさいわねー。こういうのは雰囲気が大事なのよ。それに遠くに足を運ぶんだから別に遠足って言ってもいいじゃない」
「どうせ地元の家に帰るだけだろ。遠くじゃねえよ。いいからさっさと準備しろ」
「準備できてるもん。蒼也が準備できるの待ってただけだもん」
単細胞娘はそっぽ向き、頬を膨らませていた。やっぱりただのダダをこねる餓鬼だなと、再認識させられる。
「はいはいわかったよ、俺も準備できてるよ。それじゃ、抜け出すまでの手はずを説明するからな」
「はーい」
電気はけしているからちょっと見えづらい。が、電気の消えた雰囲気からか恋は誰から隠れるかわからないがひっそりとこちらに寄ってきた。
「まず、ここから出たら見回りの看護婦が居ないか確認しながら駐輪場まで行く。だが、そう簡単にいけるとは思えないからとりあえず、看護婦に出会った時のための道具を用意しておいた・・・これだ」
そう言って俺は、恋に竹を渡した。竹は２ｍほどで、中の幹はく

り貫いてあって望遠鏡のように覗けるようになっている。
「何これ？」
不思議そうにその竹を凝視する恋。
「まぁ、使う時になったら教えるさ。使う時がこなければいいがな」
「そう・・ま、夜中に人と会うことなんて殆ど無いだろうし護身用ぐらいに思って持っておくわ」
「じゃ、出発するぞ」
こうして、俺は下準備を完璧に済ませ病院脱走の任についた・・・いや、つかされているんだが。

ガラガラガラ
まず最初の関門の病室のドアを開ける所。
ここには、出てすぐに看護婦の見回りが居たりしたら即座にゲームオーバーという恐ろしい確率的な問題があった。ゲームを始めた瞬間ゲームオーバーとは実にゲーム性にかけているが、確立は１０％ほどといった具合で難なくクリアした。
そして、俺達は見回りに使用されることの無い非常階段で１皆まで降りていって、１階に下りることも難なくクリア。
そして一番の難所、ロビーである。ここには受付があって誰も居ないが近くに看護婦室がある。非常階段から駐輪場の入り口に行くのに看護婦室から実は丸見えなのだ。
実に難門だ。
「なんか寒いわね～」
看護婦室を覗いていると後ろから緊張感の無い声が聞こえてくる。
こちらは、どっかの我がまま娘の願いを聞いてやってるって言うのに当人は人任せ。
「よし・・・お前先陣を切って行け」
「む？先陣切るって私が？いいけど」
あっさり承諾。やっぱり単細胞はありがたい。

「いいか？腰を低くして行けよ。あそこから丸見えなんだからな。見つかったらそこで終わりだからな」
「大丈夫よ。なんか、あそこの人たちお話に夢中になってるみたいだし」
考えなしの奴かと思っていたが少しは観察力があったみたいだ。
「ほれ、行って来い」
「ラジャー」
子供にとって大人を欺くことは実に面白いことであることは知っている。つまり、それは自分が大人でないことも一緒に意味されるわけで、今の恋は看護婦を欺いていて実に楽しそうだ。つまりやっぱり、餓鬼だ。
すたすたと、腰を落としてテンポ良く走っていく恋。
看護婦室を覗くと誰も気づいていない。さっきと同じで中は雑談で賑わっている様子だ。
俺もその勢いに任せて恋が行ってからちょっとして行くことにした。
駐輪場入り口の曲がり角を無事に見つからず曲がって非常灯が見えたその時、俺は咄嗟に物陰に隠れた。
「あら？貴方も病院を抜け出すの？」
単細胞少女は目の前に居た、別の入院患者に話しかけていた。
誰にも見つからないで外に出られる事を祈っていたがその祈りは神に届きはしなかったようだ。
「はて？病院を抜け出す？何を言っているのかい？」
そこには、７０代ぐらいのおじさんが居た。恐らく眠れなくて散歩がてらここまできて、ちょうどベンチがあったから休憩していたのだろう。
こいつがあれか、誰も居ない夜の病院に風流を感じる野郎か。実に邪魔だな。
このまま恋に任せていたら何をしでかすかわからない。
「あら？違うの。じゃこんな所で何してるの」

いい質問だ。俺もそれを知りたかった。
「ふぉっふぉっ、実はの夜の病院に幽霊が出ると子供が言いおるからワシが見回っていないことを証明しておったところじゃ」
そんな話を始めると、じいさんの座っているベンチに恋は座った。
俺は、恋に渡した竹の筒と同じものを荷物から取り出して恋の方まで伸ばして、声だけ届かせて対処法を説明しようとした。
『おい、恋！』
小さな声で、じいさんに聞こえないように恋に竹筒から話しかけると
「ひうぁ！」
恋は幽霊にでも話しかけられたのかと錯覚したようにびっくりした。
「ぬぉう！」
ついでにじいさんも、入れ歯が抜けんばかりの勢いで驚く。いや、70代で入れ歯はまだ早いと思うけど、じいさんだし。というか、70代とも限らないけど。
「な、なんじゃいきなり叫びおって」
「い、いや、なんかどっかから声が聞こえたような」
「ゆ、ゆ、幽霊が居るとでもいうのかい！？そそそ、そんなわけが」
「き、気のせいよね！あはははは」
馬鹿笑いをするんじゃない。看護婦室に聞こえたら終わりだぞ。
しかし、これは作戦通り行けば・・・
俺は、竹筒をベンチの下をくぐらせてじいさんの方まで伸ばした。
『おじいさぁん』
なるべく遅めに、なるべく声を鈍くさせて、なるべく耳の遠いじいさんにも聞こえるような声で竹筒から声を出す。
「うぐぉう！」
「なな、何！」
「ゆゆ、ゆ、幽霊じゃ！幽霊はおった！ひぃぃぃ～！」
じいさんはベンチから飛ぶように走り出して雄たけびを上げなが

ら自分の病室に戻ろうとしていた。
が、看護婦室から見えてしまったらしく看護婦に捕まる。いや、この場合じいさんから考えると看護婦に見つかったのは救われたと考えるべきなのだろうか。
しかしこれでやっと、駐輪場への入り口が突破できてなんとか抜け出すことができそうだ。
俺は、じいさんがこちらを指差して看護婦に何か説明していることに気づいて早急にこの場を立ち去ることに
「急ぐぞ！看護婦が来る！」
物陰から出てそのまま駐輪場へ恋の腕を掴んで走り込む。
「うぇ？！」
腕を引っ張られて驚く恋。しかし、もたくさしていたら看護婦が来てしまう。
駐輪場へ続くドアを開けて即座に入ってすぐに閉めた。なんとか、俺らは病院を抜け出すことが出来た様だ。
扉の奥ではじいさんが騒がしく何かを説明している声が聞こえてる。そしてその、説明をぼけたじいさんのバカ話と捕らえる看護婦達の声。
邪魔でどうしようもなく面倒なじいさんだと思っていたが、成功した今だから思える。
申し訳ございません。
そして、幽霊が存在すると報告される子供も、ごめんよ。

胡蝶の夢の如し（後書き）

竹筒の新しい利用方法です
ぜひともご活用くださいませ
※病院内では患者の心臓の負担になりかねますのでご使用はお控え願います

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8584z/

日食の見える病室

2011年12月29日09時46分発行